支部だより

中国・四国支部からのたより

1. 中国四国支部としての活動を開始

一昨年の本誌（47 巻 5 号）に，日本生物物理学会四国支部が産声をあげ，活動を開始した旨の紹介がなされましたが，平成 20 年の 5 月 10 日，11 日に，高知大学の朝倉キャンパスで第 1 回の中国四国支部大会が開催され，中国四国支部としての実質的な活動を開始しました．

2. 第 1 回の中国四国支部大会

第 1 回の中国四国支部大会には香川（徳島文理大香川薬），徳島（徳島大院ソシオ，ヘルスバイオ，総科，疾患ゲノム，徳島文理大健康研），高知（高知大医，理，総研，高知高専），愛媛（松山大薬），岡山（岡山大理，川崎医大），山口（山口大農），広島（広島大理，県立広島大），鳥取（鳥取大農）の各県（各組織）から 52 名の研究者が出席しました（学生を含む）．会は 10 日の昼 12 時に開始され，まず 17 時半までに 30 題の一般演題のプレゼンテーションが行われました（**図 1**）．

発表時間が限られていたにもかかわらず演題数が多く，タイトなスケジュールになってしまったことに加えて，生物物理学会に特徴的な「研究分野の多様性」のために，発表時間中に十分に討論を行うことは難しかったですが，出席者同士が「どこにどんな分野の研究者がいるのか」を理解する目的では効率よく進められたと思います．一方で，第 1 回の支部大会だったということもあって，事前の日程調整がうまくいかなかった方もおられたようで，今回お目にかかるのを楽しみにしていたけれど，かなわなかったというケースも少なからずありました．定期的な支部大会の開催を定着させることによって，支部内のメンバーが一堂に会する機会を実現し，メンバー同士の密な交流を図っていくことと，支部大会でどのようにして十分な討論，交流の時間を作っていくかということが今後の課題のように思いました．

一般講演の終了後，曽我部正博会長による基調講演「細胞力覚の分子細胞生物物理学：膜，チャネル，細胞骨格の関係」が行われました（**図 2**）．先生がこれまで進めてこられた，細胞がどのようにして機械的な刺激を認識しているのかという研究の優れた成果をわかりやすい口調でご講演くださり，とてもインパクトがありました．特に若手の大学院生にはとてもよい刺激になったと思います．

基調講演の後には簡単な総会が開催されました．平成 21 年度の年会が徳島で開催される予定ですので，年会の話題が中心で，特に年会の実行委員長をつとめられる徳島文理大学学長の桐野　豊先生に中国四国支部の初代の会長もご担当いただくこと，このたび正式に開設された中国四国支部として年会の実施をお引き受けすることの 2 点が承認され，支部のメンバーが一致団結して年会を支援，運営していくことが確認さ

図 1　一般演題プレゼンテーションのようす．

図 2　曽我部会長の基調講演．

図 3　懇親会での集合写真.

れました.

総会が終わった頃にはすでに日が暮れてしまっておりましたが，引き続き生協の食堂で懇親会を行いました（**図 3**）．懇親会では組織の枠を超えた和やかな懇談が行われ，新たな交流も始まったようでした．個人的に強い印象に残ったことは，平成 20 年の 3 月に岡山大学を退官された香川弘昭先生が「最近は学会に来ても自分の研究成果だけ発表してさっさと帰る若者が増えているが，本当はこういう研究者同士の交流がいちばん大切なんだ」と檄を飛ばしておられたことでした．自分自身，その傾向が強かったことを大いに反省するとともに，この支部大会が先生のいわれる研究者同士の交流の場として発展してほしいと思いました.

3. 牧野植物園での散策と情報交換

翌日は牧野植物園で散策と情報交換が行われました．牧野植物園は高知が生んだ近代植物分類学の権威として名高い牧野富太郎博士の業績を顕彰する施設として高知県によって設立，運営されている植物園です．私もずっと四国に住みながらもこれまで訪れたことがなく，今回はよい機会になりました（**図 4**）.

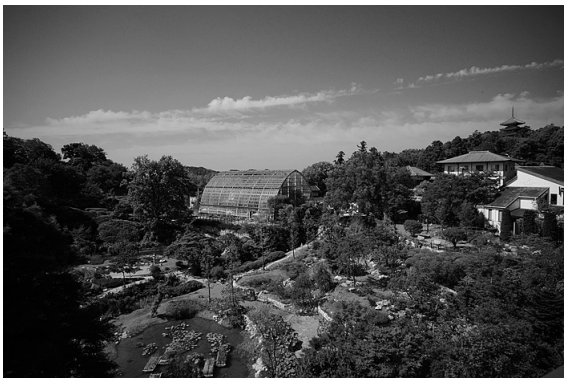

図 4　牧野植物園での散策と情報交換.（写真提供：高知県立牧野植物園）

4. おわりに

平成 21 年（2009 年）の第 47 回年会は，22 年ぶりに四国で行われることになり，アスティ徳島をメイン会場として 10 月 30 日から 11 月 1 日の日程で開催されます．中国四国支部の会員一同，多くの会員の皆さまのご参加を心よりお待ちしております.